
おいてけぼり。

HALCO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おいてけぼり。

【Nコード】

N1440N

【作者名】

HALCO

【あらすじ】

この暗闇には、私とピエロと二つの奇妙な声しか存在しない。私は何故ここにいるのはなぜだろう。おいてけぼりになるのは、誰だろう。

いつの日だったろうか。

あの時の空はやけに青くて、私もあの子たちも笑顔に満ち満ちていて、街頭に植えられた木々は新緑に萌えていて、笑ってしまうくらいに太陽は明るかった。

なのに今、私は捉われている。

右足と左足、頭と右手を黒い縄のようなものに、がんじがらめにされてしまい、せいぜい左腕の肘から下が僅かに動かせる程度だ。視界は真っ暗。匂いもなにもわからない。今自分がどういう状態で、どこにいるのか。何となく想像はつくが、考えたくもない。

胸の奥に潜む絶望から、私はじつと背を向けて、目を閉じていた。私をここに追いやった運命は、酷く残酷で、私から五感のほとんどもを奪ったにも関わらず、たった一つだけ残していった。そのたった一つ残された私の感覚が、ただでさえ身が引きちぎれそうなほどの苦しみを、さらに増大していく。

声が、聞こえるのだ。

真っ暗な世界の内側と外側から、私を呼ぶ声が。

私は必死で耳を塞ごうともがくが、体が動かないから、意味がない。

嗚呼、何という苦しみ。何という地獄。何という試練。

私はどうすればいいのだ。私の未来など、たかが知れたものだ。なのになぜ私はここに囚われたままなのだ。

わからない。何故なのだ。私は楽になりたい。ここから解放されて、外に出たい。

ここはどこだ。そもそも私は誰だ。

残された最後の五感も、日に日に劣化していくようで、今はもう鈍く籠った声しか聞き取ることが出来ない。

この声が聞こえなくなることが、私の最後の望みだった。

声がなくなれば、ここは本当になにもない空間になる。そうすれば、私もなくなってしまうのではないか。と考えていた。

だが運命はさらに私を追い詰めていく。

縛られた私と二つの声しかなかった闇の中に、一人のピエロがやってきたのは、外側から響く声が掠れ始めた頃だった。

「やあこんばんわ」

四肢を縛られ、横たわる私を前にしてピエロは帽子を取り、律義にお辞儀をする。その動作一つ一つが道化らしく、ひょうきんで自由で私は彼に嫉妬した。

- - あなたが私をこんなところに縛ったの

「それは違うよお嬢さん。あなたがここにいるのは私のせいじゃない。半分はお嬢さんせいで、もう半分は他の人達のせいだ」

- - 私が何をしたっていうの。こんなことされることをした覚えはないわ

「うーん。君はちょっと鈍すぎるね。それとも臆病すぎるのかな」

くるくると首を何回転もさせながら、ピエロはけたけたと笑う。そんなピエロを私は睨みつける。

- - あなたは何をしにきたの。私を助けに来たんじゃないの

「ちよつと質問が多いね。いい加減飽きてきた」

今度は体の関節という関節を激しくぐるぐると回転させはじめ、さすがに私は口を閉じた。そして、この場所とこのピエロが異質なものだということを、改めて脳みそに刻み込む。

ピエロは私と三歩くらいの距離ところに立って、私を見下ろす。

そして口の周り塗った紅い化粧を歪ませ、にたにたと笑った。

「僕は君を観察しにきたんだ。これからよろしくね」

暗闇の中に、もう一人の同居人がこの時から生まれた。

何日経ったのか、今の時刻も、天気も知る術は皆無だ。

奇妙な同居人も、いつもいつもくだらない手品や、支離滅裂なふざけた話しかしてこず、全く持って役に立たない。

聞こえてくる声はますます調子がおかしくなり、消えかかった時期から一転して、今は大音量で暗闇の中で響いている。しかしそれはノイズのかかったような、ぶつ切りの音でうまく聞き取ることが出来ない。

「ほらほら、見て見て」

得意げに口に手を突っ込んで、内臓を吐きだし続ける。ピエロに私は静かに尋ねた。

- 私は今からどうなるの。

「また質問かい、勘弁してくれよ」

—
—
お願い。これだけは教えてちょうだい。

「気づいているだろ。死ぬのさ」

ピエロは吐きだした臓器を、軽いステップで踏みつぶしながら、
なんともなしに言う。なんとなく覚悟していた答えに、私も意外に
もあつさり、そうなんだ。と呟く。

-
-
あなたが私を殺すの

「それはないね。僕は君を観察してるだけ。」

空っぽになったお腹の中を開いて、私に見せつける。ピエロはにやにやと笑う。

[illegible]

その時、暗闇の中に耳をつんざくような泣き声が、響いた。

私は思わず目を瞑り、静かになつた後恐る恐る目を開く。

すると視界いっぱいには、ピエロの瞳が広がり、さすが私は驚いて短い悲鳴を上げる。

「なんで拒絶するの。あんなに呼んでいるのに」

怒っているわけではない。それでも冷たさと、無機質さを含むピ

エロの声は、私には酷く恐ろしかった。

「なるほど君は忘れているんだね。じゃあ僕が手助けしてあげる」
ピエロはそういうと私の肌に触れた。

その瞬間、私の右腕千切れて吹き飛び、左足がぐしゃぐしゃに潰れてしまった。久しぶりに感じた痛みは、あまりにも強烈で私は声にならない叫びを上げる。

爪の剥がれた右腕と、膝から下が無い右足だけで何とかピエロに歩み寄ろうとするが、まるで無理な話だった。

再び鳴き始めた声と、私の悲鳴が重なりそこはたった一人の阿鼻叫喚の地獄と化した。頭から流れ始めた血が気管に入り、激しくむせ返る。

「おお、痛そう痛そう。早く思い出さないと、ほらほらもつと頭を回転させて」

自らの頭をくるくると回す。ピエロは言うが、そんな余裕私にはあるわけがない。

より一層声が大きくなる。

激しい痛みの中、何故かそれでも気を失うことも出来ず、私はうずくまって背中を丸めていた。

うるさい。うるさい。黙れ、この声はなんだ。

しかし長らく曇っていた声が、次第にノイズが晴れていくのに、私は気づいた。そして激痛の中の一瞬、確かに私の耳に、声が届く。

「お母さん！」

その声は、暗闇の中で短く響き、全身の痛みなど吹き飛ばし、何度も何度も私の頭の中でこだました。

いつの間にか、血は止まっていた。

体は相変わらずひどい状態だが、もう痛みは感じない。

「お母さん。目を開けてよ、私を見てよ。私に触ってよ」

そんな悲痛な叫びの正体を、私は知っていた。そうだ、ここに来てからもここに来る前も、ずっとずっと知っていたのだ。

呆然として、私は目の前で胡坐をかいて座っているピエロを見た。ピエロは自分の首を指の腕で、回転させているが、その回る目は私の方を向いていた。

「そっか、忘れてた」

渴いた笑いを漏らし、私は俯く。

最初はそれしか考えていなかったはずなのに。それ以外のことを、考えられることなんて出来やしなかったのに。

そうだ。昼下がりの公園に、二人の娘を迎えに行って帰る途中に、私は車に撥ねられたのだ。

宙を舞い、紅く染まる視界の中で、大きな瞳を開き固まると、血の海に転がるもう一人の娘を見た。その光景がフェードアウトしていき、私は息をするのを忘れ、ただただ頭を抱えようと左腕を震わせた。

「忘れてたんだ。あんなに悩んでたのに、どっちを取るかってこと」
視界がぶれる。

お母さん。お母さんと叫ぶ声が、胸を突き刺す。ずっと聞こえてきた外側からと、内側からの声。その二つは共に、私の名前を呼んでいた。

でも、私は二人を連れてはいけない。どちらかをおいてけぼりにしていかないと、前へ進めないのだ。

そのことを悩んで、泣いて、絶望して、そしてなにも聞こえなくなつた。

「私は、私は……」

涙が落ちた。ぼろぼろと落ちて、やがてそれはこの空間を真っ青な海にして、それでも私は泣くことを止めなかった。

「泣くのもいいけど、さっさと決めなよ。じゃないとみんなが前に進めない」

ピエロがぼこぼこ空気のを作りながら久しぶりに口を開く。

珍しく、私をまっすぐに向いている。

決められるわけがない。

どっちがより大切なんで、どっちも私を求めているのに、どっちらかの想いに優劣をつけるなんて、私に出来るわけがないじゃないか。

「じゃあくじに任せよう。僕の鼻の穴に指突っ込んで、血を出した方に君は、ついていくと。右側が上のお嬢さんで、左が下のお嬢さん」

けられらと笑うピエロを、私は睨みつける。

「早く決めないと、また忘れちまうよ。まーたがんじがらめのまま、一人ぼっちだ」

歯を食いしばる。

食いしばった歯と歯の間から、震えた声が漏れた。海は引いて、次は真っ白な空間に、私とピエロは放置された。

その日は、とても晴れた日だった。

幸せも何もかも、詰め込んだサラダのような何でもない日々で、私とあなたたちと生きていて、痛みを感じれて光りを目で感じ、春のくすぐったい匂いに鼻をくすぐられて、あなたたちに触れられて、温もりを感じられた身に余る幸せな日だった。

私はゆっくりとピエロに、唯一動く左腕をなんとか持ちあげて、手を差し出した。

最初からわかっていたのだ。どちらを選んだほうが良かったか、とは。

「先生を早く呼んで」

「お母さん！ 死なないで、お願い。置いていかないで」

慌ただしくなる、外側の世界に私は耳を澄ます。きっと外側の世界の私は、私自身の何もかもを失っている。だったら、いつそのこと、こうしていなくなることが、負担はきつと軽くなる。

ピエロがゆっくり、ゆっくり私に手を伸ばす。

「ごめん、ごめんね。母親失格だね」

「お母さん、お母さん……泣かないでよお」

そんな嗚咽する声が、私が聞いた愛する娘の最後の言葉となり、
ピエロが私の手をとった世界が暗転し、私はそっと目を瞑った。

目を開けると、私は一人暗闇の中にいた。

今までと違うのは、遙か向こうに光が見えること。そして、暖かな温もりが私の胸の中にあることだった。

泣きじゃくる声は、内側から聞こえていた声そのもので、私はそっと彼女を抱きしめる。

そして、遙か彼方にある光に目を細めた。

さよなら。と小さく、本当に小さく、呟いた。

（後書き）

読者を振り落とすくらいの急展開を目標に書きました。
でもすごく難しいですね（汗）これからも頑張っていきたいと思
います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1440n/>

おいてけぼり。

2010年10月8日14時42分発行